『春雨物語』の発想

——その歴史意識をめぐっての一断章

高田　衛

1

『春雨物語』十編のうちの異色は、「歌のほまれ」であろう。というのは、この一編のみは、小説の体をなさない類歌論の覚書であって、分量的にも内容的にも、他の九編とは、まったく性格のちがったものと考えなければならないからである。

このような、メモにも似た一編が、なぜ最終稿『春雨物語』集中に入っているかということが、『春雨物語』の成立をめぐるひとつの問題であり、今までもそれについていろいろ考えられてきた。

一方、秋成にはこれと同じ類歌論を、内容とし、かつ万葉歌人高市黒人と同時代の女流歌人（黒人との応答歌のみられる）小弁とを夫婦にみたて、その道行ぶりを仮構した、『鴛央行』という一編が、『春雨物語』とは別に存在している。小品ではあるが、小説としての虚構ははっきりしており、題名のごとく、夫婦の愛情こまやかな旅と万葉の歌とがよくまとめられている。類歌論も、小弁の問いかけにたいする、黒人の答弁として書かれており、むき出しの作者の持論という形をとっていない。

そこで、中村幸彦氏は、秋成が大沢春朔に『ますらお物語』を贈った後、同題材だが、それを虚構化して面目を一新した『死首の咲顔』(1)を書き下し、それをはじめて『春雨物語』中に加えたように、また、はじめ『春雨物語』の一編として構想していた『茶神の物語』を、執筆後にのぞまれて世継居然亭に贈ったため、この編は『春雨物語』から省いたように、『鴛央行』も、はじめは『春雨物語』の一編として書いたけれども、人に贈るなどの何らかの事情のため、これを捨てて、当座の代りとして、『歌のほまれ』と題した類歌論覚書を、かりにこの集に収めたのであろうと考えられた(2)。

うなずける見解であり、私も原則的にこのご推測を支持するものだが、その反面、『鴛央行』を、はぶいたについては、この作品の自己評価にもとづく、秋成自身の撰択意志（『春雨物語』の文学的な構成意図として）もあったのではないかと想像もするのである。

本論は、じつは『春雨物語』における歴史意識を問題とするもの

であり、当初に『鴛央行』を考えるのは無駄の多い寄り道といえるのだが、秋成における歴史小説の発想構造を考えるためには、かえって示唆多い素材なので、あえてこの寄り道から論をはじめてみようとするのである。

『鴛央行』は、秋成の万葉研究から結実したことがはっきりわかる作品である。中村幸彦氏が、そのくわしい解説(3)をされているので多くを述べないが、万葉集中の高市黒人の歌のうち、九首をえらび、近江から美濃路を経て尾張・三河までの道行ぶりに構成し、配するに、万葉二七六・同二七七の黒人夫妻の旅の別れの歌を媒介にして、これを万葉三〇五の黒人の近江旧都歌の作者が、後註に「或曰、小弁作也」とあるのをもとに、「小弁」という名の妻との同行として仮構しているのである。そして、これらの万葉歌の内容と修辞はともに小説の構成の不可欠な要素となっていることは注目しなければならない。

「たづ鳴きわたる」という末七の句の同一形を問題にした類歌論も、黒人の万葉二七一の歌を中心に、黒人の作歌論として述べられており、これらは、また『史論』『金砂』巻三にもみえる秋成の独自な見解であることも、もはや周知であろう。

以上のように、秋成晩年の万葉研究のうちの、高市黒人の周辺を抜萃すると、おのずからに構成されてくるなめらかで自然な虚構が、そこに考えられるという意味で、作品『鴛央行』の発想には、彼の学問との脈絡が明快に指摘できることは事実である。しかし、それとともに『鴛央行』が、その題名がそうであるようにかなり甘美な物語となっていることも、注目しなくてはならないであろう。

その甘美さは、この作品が、相思相愛の夫婦の道行ぶりとして構想されたとき、すでに予定されたであろうけれども、かといって、妻小弁を男装させてまで同行するという道行の虚構が、古歌の考証からのみ発想されたとは考えにくいのである。読者は、ここにもう一つの発想を予想せざるをえない。

秋成は、わざわざ、文章の一節を、夫婦の道行の解説のためにさいて、次のように述べている。

あはれ〳〵昔の人は心にうらなく誠のかぎりもてつかへしものぞ。おほやけの御使ならぬには、男もわたくしざまには旅ゆきせず。さるは出で立つ毎に面白き所に来ては、此浦山のたゝずまひを父母妻子に見せましなど打歎きてよめるは、誠の限りなり。治れる今のおほん時にも仕ふる人の私なる草ぶしはせぬを、民草の上こそいともうらやすけれ。ある人、芳野の花、須磨明石の月、こゝかしこの拝ませにも、しりへに立ちて相離れず行くは、今の御代の忝なきを推し戴くべきにぞありける……。

ここには、「今」の「民草」の気やすさの実感に立って、「昔の人」の制約多い旅が説かれている。文中、「ある人」が、芳野にも須磨・明石にも妻を同伴したことを記しているが、秋成じしん、妻を須磨・明石、あるいは大和や、但馬へ伴った経験の持主(4)であることが思い出されるわけである。すくなくとも、この文は、何らかの情念的「経験」にもとづきながら、古代における詩人夫婦の道行ぶりを、ロマネスクな構図に仕立てようとする意図がうかがわれる

ようである。そして、それだけではなく、秋成は、さらにこの文を次のようにつづける。

さるはあまさかる鄙の旅路も、おのが宿にして相思はゞ、白金も黄金も玉も何せん、心には世の業を忘れ目には知らぬ境を見渡し、翅あらねど花に木づたひつゝ、日毎にながめを改めて遊ぶらん。いとこそ羨しけれ。

ここに、心すなおな男女の旅の理想化があり、憧憬があることは明白であろう。孤独で年老いた作者の、かけねなしの羨望さえうかがわれるように思われる。この理想化や憧憬の背後にあるものを、知的な営為としての学問や思想とみるより、それに加わったもっと衝動的、人間的な美的情念の存在として考える必要があるのではないかというのが私の考えである。

私がいいたいのは、『鴛央行』のように、秋成の方葉研究（歌学）からの派生を明快に探知することのできる作品でさえも、その虚構としての発想には、明白な人間的主題があるのであって学問的主題なのではないという、ある意味ではわかりきったことにつきるかもしれない。

私は、さきに妻の歿後の秋成の、足立紫蓮との交渉をめぐる風流の構図についてのべた。そこで『山霧記』の中の、能因法師の歌ならびに、その歌につきすぎたとして批難される頼政の歌をめぐっての、秋成と紫蓮の対話の姿勢に注意したつもりである。

『鴛央行』の類歌論が高市黒人と小弁との対話からひき出される構成をみれば、このような記述の原型のひとつが、すくなくとも、その風流（美学的）志向において、『山霧記』の秋成と紫蓮の対話にもあったことを、私は指摘せざるをえない。そこには、知識の叙述としての対話だけでなく、ひとつの情念的世界としての、男女の対応の構図もふくまれているからである。

そうしたものへの、秋成の感情的傾斜その他については、よくわかっていないのだが、作品『鴛央行』では、そのような私的な情念的な発想契機が、作者にとっても思いがけないほど、あまりにあらわに露出してしまったのではなかったか。

「何事もあからさまにこそあらまく」（『秋の雲』）とした秋成であり、作品の中に、自分の学問や思想を「むきだし」にすることの多い秋成であったが、それにしても『鴛央行』の道行ぶりの甘美な感傷は若々しすぎ、ある意味では、私的な情念が露出してしまっているといわざるをえない。最終稿『春雨物語』が、この一編を省いたことに、秋成自身の自己批評、「恥」の意識のようなものを感じないわけにはいかないのである。

2

『鴛央行』はまた、一面では歴史小説の発想過程の一例をしめす意味で興味ぶかい作品である。いうまでもなく、すでに指摘されているように(5)、秋成の壬申の乱にたいする、または万葉集の中の「近江荒都の歌」にたいする、猛烈な関心がなければ、あるいはこの小品は成立しなかったかもしれないのであり、また、そのことと、作者主体の人間的主題との重層を考えうるからである。『鴛央行』で

は、高市黒人をかりて、次のような近江荒都の歌の成立の人間的な動機をのべているのである。

　さればよ。今の御時には忍びにも語るまじき古言なるを、我おほ父達そこのぞうの人々も、この都の御為に亡び給ひしには、かう荒れはてたるを見て、海吹く風も骨に泌み通りて、いたくもいにしへ偲ばるゝよ。

近江廃都の跡に立った黒人の述懐としての一文なのだが、これは人麻呂の「過近江荒都時」の歌や、黒人の「感傷近江旧堵作歌」についての、万葉研究家としての秋成の持論であった。

秋成は、歌にも散文にも、「慷慨」（『金砂』六）もしくは「怨恨」の情の潜在を敏感に感じとる素質の持主であったが、これらの歌については、その傑作の意味を、鎮魂のしらべとして感じとったことを、すくなくとも、自己の独創と考えていたのである。「さゞ波のしがの宮古のあれしとて、人丸のかなしげによみしは、誰心づかぬよ、大津の忠臣の末のものの心なり」（『胆大小心録』）一五八）とみずから述べているのは、そのひとつの証である。この論の特徴は、人麻呂・黒人らの近江荒都の歌の成立の契機を、それぞれの祖霊鎮魂の衝動とみる点にあった。すなわち、人麻呂や黒人の父祖が、壬申の乱において死んだとし、近江荒都の荒涼の中に、それら父祖の死霊の怨恨の声をきいたとするのである。このような発想は、じつは近世に入るとめずらしいものではない。「夏草やつはものどもが夢のあと」という芭蕉の一句がしめすように、歴史の追懐は、その地にひそむ死者の声をきくという形式をとることが伝統的であった。

『金砂』六では、黒人の「感傷近江旧堵作歌」に秋成は次のような評を加えている。

　黒人も同じく大友の麾下に亡びし人の一族にて、ここに来て見れば、我もやそのかみの人か、すずろに悲しきはと、又かく荒にしは、このさざ波の地霊神（くにつかみ）の御心よりかくも荒たるにや、柱倒れ瓦砕しままに朽たる、上は草蒸て鬼のすみかと見ゆるを、さればこそゆき見じと常に思ひしを、さすがに昔しのばれて、此悲しきを見つるよと云、千とせあまりのむかし人のために涙おとさるゝは、実に真言の道と云べかりけり。

そして、秋成自身の人麻呂観と同じく、言外に「心裏（したた）には一族の大友の御為に亡びしを深く悲しむ也」という遺孫としての慷慨の情を仮定しているわけである。

こんにちでは、これら「近江荒都の歌」群が、壬申の乱で亡びさった天智系の御霊にたいする。勝利者天武系宮廷の側からの鎮魂歌であったこと、そのような公的呪術的要請が人麻呂・黒人らの個人的感懐を超えた、歌の成立の契機であったことがほぼ公認されているが、秋成はこれを、戦死者としての家祖への追悼・感懐という、ある意味では私的な契機として解していたということになる。

日本伝統の祖霊信仰が、先祖―家祖信仰という形で、「家系」意識を中心に「家」という単位に集中していった近世にふさわしい解釈といえるが、この場合の「家系」はまた、家父長支配制において、かならずしも私的とのみはいえなかったこと、そこには半ば公的な

一面もあったことを私たちは考えなくてはならないであろう。すくなくとも、斉藤茂吉の「過二近江荒都一」といふのだから、作者の人麻呂が何かの事で近江へ行って、其処を通った時、或はたづねた時の歌のやうである。僻案抄に、〈標題に過近江荒都時とあれば、過の字によるに、一時の感慨をよめる歌とみえたり〉と云っているのは妥当であらう。（略）この近江大津宮の荒廃は当時人心感動の対象となったものの如く、黒人の作に矢張りこの旧都を歌ったもののあるのはその証拠である」という意見のように、純粋な個人的感懐とみるのとは、すこし受けとり方がちがっているわけである。

このような秋成の解釈が、たとえば人麻呂や黒人の家系調査といった学的検証によって生れたのではなく、秋成のうけとめた古歌の実感から生れていること（逆に、この歌を資料にして、秋成は人麻呂・黒人らを、「大津忠臣の末のもの」と指定するのである）は、秋成の歴史観の基礎構造を暗示して興味ぶかい。秋成は文学的な感動（それは、彼にとっては作者の「悲憤」の問題にゆきつくものであることは先に述べた）の背後の、人間的な葛藤・対立の劇として歴史を直観したのである。つまり、秋成の歴史理解の方法においては、学的な検証に相当するのは、与えられた歴史史料にたいする人間論的な思索と判断の客観性だったのであり、かつその基準となるのは、現実的な認識を根拠とする直観であったということである。この場合、秋成の歴史への関心は当然に、歴史の全体的な流動とともに、その中で劇的に生動する人間又は人間の運命にたいする興味、すなわち人物論または人間論として方向づけられることになる。

「近江荒都の歌」についていえば、その歌としての成立の背景に、悲憤の状況を秋成は措定せざるを得なかったし、それが「実に真言の道」であるという、彼自身の文学観（根底に著書発憤説や「詩経」毛詩などの教養を条件とする）に一致するかぎりにおいて、歌の文学的感動は、歴史への人間史的省察として、人間的な思索のなかに編みこまれているということになる。

さて、そのような歴史への関心は、ここではとくに近江荒都歌への関心を媒介とした壬申の乱への関心となって、記述形式が、文学的であると否とを問わず、そのような歴史そのものに集中されてゆくはずのものであった。そして、秋成は、万葉註釈の『金砂』六や歴史随筆『史論』その一で、その壬申の乱にたいする丁寧な記述をはたしている。中村幸彦氏が指摘されているように、その記述の導入は「近江荒都歌」の検証の後、「さてこの荒都の物語を、思ふまゝに蛇に足を添ていはん歟」（『金砂』六）・「この荒都の事につきて、蛇に足をそえて絵がけるに倣ひ、おもふ事をいはん」（『史論』）という研究上の「蛇足」としての前文であり、長文の壬申の乱および天武系王朝についての記述本文の最後では、次のように述べている。

正史といへども時にあたりては実を退け譌を設くる、是亦人力の天を誣くなれば、遂に其事後に見あらはさるべし。舎人親王薨ぜられて後に、崇道尽敬天皇の贈号を賜へりしが、御子和気王の隠謀の罪に連りて停められ給ふは、是はた皇祖神の天心

にたがはせけんとおもふは、いともかしこく身におはぬ論定(ことさだめ)なから、世は寔によるかたなきものとおもふ心の煩ふまゝに、此長物がたりをも打出づるなり、

いつはりも真言もよしや世に流れ
よどめるほどを書もとゞめん

（『金砂』六）(6)

この部分をさして、中村幸彦氏が、秋成の歴史への興味から歴史小説への推移を説明されているのだが、ここにはあきらかに、「正史といへども時にあたりては実を退け譌を設くる」という、正史批判の立場がみられることが注目できるであろう。

3

この時代、文学としての万葉集・万葉歌の研究とはもともと歴史研究であったことは心得ておかねばならない。万葉に限らず、古典研究と歴史研究は、まだ分化していなかったのである。それだけではなく、学問の概念もまた、大きな変りめにあった。「見聞広く事実に行わたり候を学問と申事に御座候。学問は歴史に極まり候事に候」（徂来『答問書』上）という学問意識がどこまで普遍化していたかは厳密な考証を必要とするが、どちらにしても「歴史」が、当代の大きな知的対象として浮び上っていたのである。そして秋成の万葉研究もまたひろい意味での（歴史研究を包含した）「古代研究」の性格をもっていたことは認めなくてはならないのである。

しかし、この場合でも歴史への関心または研究が、ただちに『春雨物語』という歴史小説の成立に結びつくわけはないのであって、たとえ秋成の歴史への関心が、古歌の注釈から大きく逸脱し、彼じしんのいう、研究上の「蛇足」としての「長物語」にいたるという事実があったとしても、それはあくまで「古代研究」上の余談の存在であって、歴史小説の成立契機を説明するものとはなり得ないであろう。

ただ、秋成個人についていえば、彼の書くものが生涯を通じて、どこかに小説性（虚構性）にうらうちされているという特徴から、彼の小説家的主体性において、晩年の古代研究をも、一作家の題材・素材論においてみてしまう傾向が、今まではあった。そのような考え方に立てば、壬申の乱も薬子の乱もたんなる素材に還元されてしまうことになる。

秋成においては、歴史への省察や分析が、学問的な範疇を超えて、フィクショナルなイメージに逸脱しがちな傾向は、彼の小説家的主体性において容認しなければならないが、その彼が、『雨月物語』や『癇癖談』のような作品を持つのであってみれば、ここに創造された歴史小説集としての『春雨物語』が、それら従来の作品とちがった文体の創造をともない、ちがった内面構造によって組成されていることを認めなくてはならないであろう。

考え方によれば、『雨月物語』もまた歴史小説集であった。ただ『雨月物語』は歴史上に素材を求めながらも、「怪談」であり、飜案小説であるという様式的な制約を逆手にとって、独自な文体と主題性を持つことに成功したのである。それと同じように、はじめ歴

史小説集として構想された『春雨物語』も、ただ歴史への関心、素材発見ということで書かれたのであれば、あのような従来と全く異なる新しい文体の創造を必要としなかったであろう。

『鴛央行』一編の検証において、私はそれが小説であるためには、作者の万葉学との脈絡よりは、人間的なある主題の発想を必要としたと述べ、またこの編が『春雨物語』十編から洩らされた理由のひとつとして、この編の主題にたいする自己検閲もあり得るとしたのは、『春雨物語』の構想および初稿前後において、ここに全く独自な歴史小説の発想をみるからである。この問題については、じつは森山重雄氏が、秋成の歴史意識を宣長のそれとの対比において、またアランを援用しつつなされた歴史の記述と小説の記述の本質的相違性の指摘において、述作されている(7)ところであるが、私はまた別な角度から、この問題にこだわってみたいである。

『鴛央行』についていえば、この一編が『春雨物語』初稿前後において、独自な歴史小説的発想に支えられていたのは、近江荒都歌の成立をめぐる秋成の祖霊鎮魂説の人間化の主題であり、先に書きおとしていたが、彼の類歌論における言霊的歌論叙述の主題によってみることができるのである。

ただ、これらの主題は、この段階では二つの方向に分裂したのであった。

ひとつは、作者自身の情念的「経験」と結びつき、古代歌人夫妻の道行という男女相対の構図においてやや自己抑制を欠くかたちで幻想化された『鴛央行』の成立へ、もうひとつは（成稿の前後関係としてではなく）歴史記述（正史批判）としての、万葉歌註釈の「蛇足」としての「長物語」へである。

ここで、先述の秋成の壬申の乱の記述（「長物語」）に問題をもどさなければならない。

秋成の壬申の乱論は、儒仏の二教が日本に渡来し、あるいは「禅位簒立の智略を見聞きて天性の情慾を募らせ」、あるいは「人の情慾をつのらし性質を蕩かす妙法（仏教）」として、日本の古代人の本性を歪めたという規定からはじまっている。真淵学の思想的受けつぎはあきらかであり、蘇我一族史、聖徳太子論、孝謙女帝重祚問題とつぎつぎに展開しながら、結果的には、壬申の乱前後の王族・人臣の悍悪史として書き下している点が特徴である。そして、天智帝・大友皇子などを論じながら、この時期の人皇の変転ただならぬ動きを、「命禄」と呼ぶ一種の運命の流れとしてとらえ、最後に、壬申の乱の勝利者側天武王朝が、称徳帝を最後に滅びてしまうまでを述べるものであった。

あきらかに、これは史論のスタイルであって、末尾は先に引用したとおりに、一種の正史不信の立場をしめすにいたっているのだが、その正史不信の立場とは具体的にいえば、史書『日本書紀』天智・天武巻の記述が、天武王朝側の政治的宣伝にもとづくものではないかとする疑義であり、（それゆえに天武血統の廃絶を指摘したのであった）ひいては、歴史史料（文献）における事実感覚への不信につながるものであった。秋成の文献不信論は、彼の学問の一特徴であり(8)、真淵・宣長のごとき文献学が彼においてはついに成立しなかった根本の理由であるが、しかし、それゆえに彼は、史論や歴史記述の立場を持つことができたともいえる。

つまり、秋成の歴史研究にあっては、史書・史料の記述の正否については、あくまで現実的な認識者としての秋成の主観ないし直観が、その現実性において留保されており、そのことが、彼の立場と研究を、歴史記述としてよりは、歴史小説の発想へ近づける重要な条件となっていたのである。

4

森山重雄氏が指摘されたように(9)、秋成は歴史を、大きな時代との連関の中での人間の葛藤の劇としみようとする。そこでは「自然の運転」（『呵刈葭』）という概念のもとに、歴史とは人間の劇の連続とくりかえしと観ぜられるから、もちろん近代的な意味での歴史概念はないといわなければならない。史書・史料の事実感覚への不信が、秋成にとって文学的な「歴史」のイメージを解放するとともに、逆に秋成を歴史の中へ行為者的に参加させるからである。秋成は、そのことをさして、宣長のいう「復古」に反対し、「ただ打まねぶは擬古也」（『文反古』）といい、「擬古は学びて得べし、復古は学者の贅言なり」（『呵刈葭』）といった。

『鴛央行』一編は、ある意味ではそのような「擬古」の学びの一つの習作とみることができるであろう。近江荒都の歌の「悲憤」の構造を語ることは、その意味では、壬申の乱の死者の声を彼もまた聞くことであり、そして忘れさられた壬申前後の古代人の、終止することを知らぬ恨みをふくんで、さ迷うことであった。万葉類歌に、古いことばの世界の言霊のしあわせを見ることは、また秋成が狭い現代のことばの制約からはばたくことでもあった。

けれども、「擬古」はまた、「擬古」という制約にたえず覚醒することであろう。『鴛央行』の甘美な道行の構図は、それが作者の情念にあまりにも若々しく直結するならば、「擬古」の規矩をはなれたものとして、自戒にあたいするのである。

最終稿本『春雨物語』の序文には次の一節がある。

　されどおのが世の山がつめきたるには何をかかたり出ん。むかし此頃の事ども人に欺かれしを、我又いつはりとしらで人をあざむく。

初稿『春雨物語』は、最終稿本に先立つ十数年前に構想され、筆を下されているのだが、その序文草案のうち、右に相当する部分は次のとおりである。

　いにしへの事ともふみのつかさのしるせをおもひ出て、たれ問はすかたりて、いつはりすへきを、我いつはりて又人の譌りとなる。

ともに難解ではあるが、そこには、史書の記述を「いつはり」と見定め、しかし、その「いつはり」に参加して、また「いつはり」をなすという歴史にたいする文学者の挑みが読めるのではないだろうか。

（未完）

註

(1) ただし、断簡が天理冊子本中にみられるので、『ますらお物語』との先後関係は断定できない。
(2) 中村幸彦氏岩波版日本古典文学大系『上田秋成集』解説二三ページ。『秋成』一九八ページ等。
(3) 校本『春雨物語』二四三ページ。
(4) 拙稿『紫蓮覚書』立正女子短大紀要10号。
(5) 校本『春雨物語』二四〇ページ。
(6) 『史論(一)』に収めるところも小異はあるが、ほぼ同文である。
(7) 森山重雄氏「秋成の文学思想」と「春雨物語」（『封建庶民文学の研究』所収）
(8) 拙稿「歌聖伝ノート」日本文学通信六号。
(9) 森山重雄氏『封建庶民文学の研究』三三三ページ。